

ピア・レビュー

本欄では各論文についてのピア・レビューを掲載した。各論文の趣旨および今後の展開可能性について論じられている。本文を読む際に参照されたい。

○佐藤彰宣「海外サッカー」のメディア体験―映像への渴望と食傷―

サッカーが現在ほどメジャーではなかった一九九〇年代以前を対象に、ニュース映画からテレビ番組、ビデオ、衛星放送へと映像メディア史と重ね合わせつつ、「海外サッカー」のメディア体験の変容を跡付けている。かつて試合映像を渴望していたファンたちが、「いまここ」の一回性に拘束されなくなったことで、かえって「いつまで経っても見ない」視聴態度が生み出されたという逆説的な結論は、普遍的なメディア論にもなっている。

人気がほぼ日米とその周辺国のみに限られる野球と、欧州と南米を中心とすつつ全世界的な（しかし日本で

はマイナーであった）サッカーとの対称性が、メディア受容の偏差として現れるのも興味深い。近年の日本人サッカー選手の海外での活躍は、グローバルな文脈への日本の参加か、あるいは野球と同様のドメスティックな文脈への回収か、いずれを意味するだろうか。国際的な比較研究にも開かれていよう。

(比護遥)

○木下浩一「ジャーナリズム教育とジャーナリスト教育の課題」

二〇〇〇年以降、大学・大学院でどのようなジャーナリズムに関する教育を行ってきたのか。筆者は、ジャーナリズム関連教育を対象とした論文・報告書を資料として、企業の立場、高等教育機関での教育実践、海外の事例と産学のメディアエーターという四つの側面からこの問題を考察している。近年のメディア現場では、OJTがすでに「限界」に直面し、企業は新人教育の前倒しや外部化を求めようになった。こうしたニーズに応じて大学が新聞学科を開設し、実習科目の

増加も図っている。日本新聞協会や日本マス・コミュニケーション学会などの産学のメディアエーターとしての役割が期待できるが、メディア企業とアカデミズムの両者に埋め難い溝があったことは認めざるを得ないという状況が描き出されている。本稿は、著者のこれまでのニュースの娯楽化への関心から発展させた意欲作である。ジャーナリズム関連教育がもつとも注力すべきものとして本稿の最後に挙げられた「ジャーナリスト的な論理的思考力」に関する筆者の今後の研究が期待できる。

(王令薇)

○彭永成「結婚式情報のメディア史—新聞、雑誌と専門業者の角度から」

結婚情報誌『ゼクシィ』について多角的な考察を続けている論者による、「結婚式情報」についての考察である。結婚情報がメディアによって媒介され流通するのは、実は歴史的にはきわめて新しい事態であり、かつ、その短い歴史においてすら、劇的な変化が起きて

いるという事実が明らかにされる。そしてその情報流通の変化は、結婚という人生の一大事にかかわることであるだけに、人を愛し、結びつき、共同体を構築するという人間の根本的な営みにまで影響を及ぼし、変容を強いていることが浮き彫りにされる。社会史として新しいジャンルを切り開こうとする野心的な試みといえよう。

ただ、明治から現代までの結婚式の変遷をたどるといふ本稿の射程の長さが、逆に内容的な踏み込みの甘さにつながっているとも感じられるのは残念である。また、読売新聞というメディアを取り上げる一方で結婚に関する専門業者についても検討する視野の広さは、逆に論考の焦点をぼかす結果にもつながっている。それは、論者の問題意識を十分に検討するには長大な紙幅が必要であることの証左でもあろう。今後の研究の進展が待たれる。

(松尾理也)

○本田毅彦「一九七〇年代のイギリス王室ソープ・オペラを読み解く」

本誌第六号に掲載された「一九七〇〜八〇年代イギリスのテレビ業界に見る王室ソープ・オペラの起源と展開」の続編であり、ホームドラマ化したテレビ「時代劇」のストーリー分析からその社会的機能を読み解いている。「メディア化された君主制」(mediated monarchy)という主題は、これまでも水谷三公『イギリス王室とメディア―エドワード大衆王とその時代』(文春学藝ライブラリー)などで扱われてきた。しかし、「利用と満足」研究からカルチュラルスタディーズまで大衆文化の中心的研究対象とされてきたソープ・オペラをイギリスの「ソフトパワー」問題として検討した視点は新しく、高く評価できる。注記を見る限り、イギリスにおける近年のメディア研究も参照されているが、メディア史という観点からすれば、日本でも紹介されている「メディア帝国主義」(ジョン・トムリンソン)という視角、あるいは一九八〇年代のアメリカの国際的ヒット作『ダラス』のような大富豪一族のソ

ープ・オペラを扱ったテキスト分析(イエン・アング)などとの相違点などを、テレビ史研究の前提となる枠組みとして示して欲しかった。

(佐藤卓己)

○FUKUMA, Yoshiaki. The Arguments on War

Experience in Postwar Japan and " Criticism of Victim Mentality "

本稿は「和解学」をテーマとする国際ワークショップへ提出されたレポートに基づく英語論文である(しかしコロナ禍のために、同ワークショップでの報告はなされなかった)。日本社会における戦争体験をめぐる議論がベトナム戦争を契機として深まりを見せたことに注目し、そうした議論の中から「暴力が『正しさ』を帯びた構造への問い」という普遍的なテーマを抽出した上で、国際的規模での「和解学」の樹立を目指すべきことが提案されている。ベトナム戦争を契機とする議論での世代間対立の顕在化は、同時期のドイツ社会での「戦争の記憶」をめぐる世代間対立と対応して

おり、比較の観点からの作業が大いに期待される。また、コロナ禍に襲われた世界で沸き起こった Black Lives Matter 運動が「歴史における責任」を問うていることは明らかであり、「暴力が『正しさ』を帯びた構造」を問うことを呼びかける本稿の趣旨と響き合うもの、と思う。本稿が、日本社会の研究者からの重要な提案として、とりわけ極東および東南アジアの研究者諸氏からの反響を得ることを強く期待する。

(本田毅彦)